

1920年代のムハマディヤを語るふたつの定期刊行物

——『スアラ・ムハマディヤ *Soeara Moehammadijah*』と
『ビントアン・イスラーム *Bintang Islam*』——

小林 寧子

はじめに

世界最大のムスリム人口を擁するインドネシアでは多くのムスリム団体が活動しているが、中でも主流となるのは「イスラーム伝統派」のナフダトゥル・ウラマー Nahdlatul Ulama (ウラマー [宗教学者]の覚醒, 1926年スラバヤで結成)と「イスラーム改革派」¹⁾のムハマディヤ Muhammadiyah (ムハンマドに従う人々, 1912年ジョクジャカルタで結成)である。両者は、ライバル関係にはあるものの相互補完的に発展し、インドネシアの市民社会の土台を築いている。

インドネシア研究においてイスラームが重視されるようになったのはこの約四半世紀に過ぎない。しかも、関心は現代に集中しており、過激な行動に出る集団の「危険性」がクローズアップされて政治との関りで論じられる傾向にある。2つの主流イスラーム団体は時代の変容に適応して生き延びるレジリエンスを見せているにも拘わらず、いわゆる「急進派」の浸透を阻んでいることは忘れられがちである。インドネシア共和国よりも長い歴史を有するイスラーム団体はどのようにして社会に根を下ろすようになったのかを、改めて考える必要がある。

本稿では、インドネシアで独立前に全国展開した唯一のイスラーム団体であるムハマディヤを再考するための準備作業として、ムハマディヤの機関誌『スアラ・ムハマディヤ *Soeara Moehammadijah*』(「ムハマディヤの声」を意味する、以下 SM)と、ムハマディヤの若手指導者が一般読者を対象として発刊した情報誌『ビントアン・イスラーム *Bintang Islam*』(イスラームの星、以下 BI)の資料としての性格および有用性を検討する。期間はムハマディヤが活動を拡大させる

1) ここでいう「イスラーム改革派」とは、19世紀末から始まったイスラームの内部改革と近代化をめざすイスラーム改革主義運動に共鳴する勢力を指す。この運動は、帝国主義列強による侵略に強い危機感を抱いたアフガニー(1838/9-97)が民族や宗派を超えたムスリムの連帯と社会改革を唱道したのに始まり、その弟子アブドゥ(1849-1905)などがカイロで展開してイスラーム圏に広がった。イスラーム初期の時代を理想としてクルアーンには近代に有効な原理が示されてあると考え、新しい時代の問題にはクルアーンとハディース(預言者ムハンマドの言行録)を直接参照して対処すべきだと主張する。一方「イスラーム伝統派」は、過去のウラマーによる知的蓄積(古典文献)を重視して新しい見解を出すのに慎重な姿勢で臨むが、やがて漸進的な改革に着手する。改革派は、近代性を強調することから「近代派」と記されることもあるが、現在ムハマディヤ自身が *pembaruan*(改革, 革新)を標榜しているので、ここでは「改革派」を用いる。

1920年代に限定する。

以下、第1章では、SMとBIが出版された時代背景を確認するために、当時のメディア状況を概観し、1920年代初頭までのムハマディヤについて概説する。第2章と第3章では、それぞれSMとBIの創刊に至る経緯、発行状況、掲載記事の傾向などについて説明する。最後に第4章では、なぜ先行研究ではこの2誌はあまり使用されなかったのかも考たうえて、この2誌をもとにした1920年代のムハマディヤに関する研究の可能性を探る。

第1章 プルグラカン時代のムハマディヤ

1) プルグラカンとメディア

植民地期のインドネシアは、「オランダ領東インド」(オランダ語で *Nederlandsch Indië*、マレー語〈当時はムラユ *Melayu* 語、のちにインドネシア語と呼ばれるようになる)で *Hindia Belanda*、通常 *Hindia*)が正式名称である。当時ブミプトラ (*bumiputra* 土地の子)²⁾と呼ばれた「原住民」の運動組織が登場したのは、オランダが新しい植民地政策「倫理政策 *Ethische Politiek*」を導入した20世紀に入ってからである。

倫理政策の重要な柱のひとつは教育であり、それまで極めて限定的であった近代教育が拡充された。先行したのはオランダ語で教授するエリート対象の教育であり、これは植民地行政拡充に必要とされる官吏養成が目的であった。少し遅れて一般庶民対象のマレー語による初等教育も始まった。近代教育を享受したエリートが自らの権利擁護を求めてブミプトラの運動体を結成するようになる。

1908年、ジャワ人下級プリヤイ (*priyai* 貴族)が教育による社会的上昇をめざして、ブディ・ウトモ *Budi Utomo* (最高の徳)を結成した。1912年(1911年とも記される)には華人の商業活動に対抗するバティック商人が中心となってイスラーム同盟 *Sarekat Islam* を結成し、大衆を巻き込んで急成長し、政府に政治経済的な要求をするようになった。やはり1912年には印欧混血人を中心にした東インド党 *Indische Partij* が登場して東インドの独立を主張したが、半年で解散に追い込まれた。数々の問題でイスラーム同盟は1910年代末には運動が縮小した。そのエネルギーの一部は1920年にアジアで最初の共産主義組織として台頭したインドネシア共産党 *Partij Kommunist Indonesia* (1924年に正式改名)に受け継がれた。しかし、オランダ植民地政府は当初のリベラルな姿勢から抑圧的な政策に転じた。追い詰められた共産党は1926年末から翌年初めにかけて西ジャワや西スマトラで武装蜂起を起こして壊滅に追い込まれた。このように、ブミプトラが政府に対して声を出して政治的要求をする活動をプルグラカン (*pergerakan* 運動)と呼ぶ。ムハマディヤが誕生して運動拡大するのもこのプルグラカンの時代である。

出版に関して、植民地政府は「オランダ領東インド法令 *Staatsblad van Nederlandsch-Indië*」1856年74号「出版に関する規則」で出版前の検閲を定めていた。新しい政策による状況の変化を見越してか、この規則は同法令1906年270号で出版後24時間以内に1部を当局に提出することを

2) 先祖代々その地に生れ住んだ人々を指す。この用語は、独立後は使われなくなり、代わりに「プリブミ (*pribumi*)」が使われるようになった。なお、本稿ではマレー語/インドネシア語は基本的に現代表記で示すが、固有名詞はこの限りではない。

要求するように改訂された。時事情報を提供する定期刊行物は19世紀後半からオランダ人、印欧人、中国人が編集発行してオランダ語、マレー語、ジャワ語で発行されていたが、20世紀初頭にはブミプトラのジャーナリストも登場して編集発行を始めた。また、移民のアラブ人や中国人が自らの権益を代表する団体を結成してそれぞれ機関誌を発行した。ブミプトラの団体も主にマレー語で機関誌を発行し、政治性のある情報が拡散されるようになった [Adam 1995]。

マレー語定期刊行物出版の増加は倫理政策の成果でもある。1918年に65点であったものが1937年には470点になり、実に約7倍に増えている [Kobayashi 2020: 105]。プルグラカンは集会和新聞・雑誌(当時はほとんど区別されずにスラット・カバル surat kabar と呼ばれた)を運動の手段とした。当初の定期刊行物は運動組織の機関誌が主流であったが、1920年代には一般読者をターゲットとした情報誌(商業誌)へシフトしていくという傾向がみられる。ただし、このリストから漏れる定期刊行物もあったし、大半の定期刊行物は短命に終わった³⁾。

倫理政策はブミプトラの言論・出版を促進する一方、政府は原住民運動監視のために新聞・雑誌をチェックした。毎週『原住民および中国人マレー語新聞雑誌記事摘要 *Overzicht van de Inlandsche en Maleisch-Chineesche Pers*』(以下 IPO)⁴⁾を発行し、非ヨーロッパ系(ブミプトラ、中国系、アラブ系)の定期刊行物に掲載された情報を要約した。IPOは定期刊行物をジャンル別に分けて整理しようとしたが、当初その分類法は一定しなかった。しかし、1930年9月15日付リストからは固定化して次の9つに分類された。このリストには237点の定期刊行物名が掲載されているが、以下にそれぞれジャンル別の数も記した。

- A. Godsdienstige Bladen (宗教誌) 42点
- B. Jeugdbladen (青少年誌) 19点
- C. Vrouwenbladen (女性誌) 7点
- D. Vak-en Vakverenigingsbladen (職能・労働組合誌) 45点
- E. Nieuwsbladen en Periodieken in de Buitengewesten (ジャワ・マドゥラ外の新聞・定期刊行物) 33点
- F. Nieuwsbladen en Periodieken op Java en Madoera (ジャワ・マドゥラの新聞・定期刊行物) 48点
- G. Arabisch-Maleische Bladen (アラビア語・アラブ系マレー語誌) 3点
- H. Japansche-Maleische Bladen (日本系マレー語誌) 1点
- I. Chineesch-Maleische Bladen (中国系マレー語誌) 39点

A. 宗教誌は、1926年から最初の項目にあげられるようになったが、重視されるようになった証拠でもある⁵⁾。また、237点のうち151点がマレー語のみ、34点がマレー語と他言語との併用であり、

3) 植民地期の定期刊行物については Yamamoto [2019], Kobayashi [2020] を参照。

4) オランダ植民地政府機関のバライ・プスタカ (Balai Pustaka/Volkslektuur 国立出版局) が新聞・雑誌の記事を要約したもので、日本がインドネシアを占領する直前(1942年2月)まで毎週発行された。いつから始まったのか正確な時期については、ライデン大学図書館、ハーグの国立文書館でも確認できなかった。筆者が実際に見た中で一番古い IPO は、ジャカルタの国立図書館に所蔵されている1918年44号である。

5) ただし、必ずしもこの分類は明確なものではない。例えば B. 青少年誌や C. の女性誌は1930年に登場あるいは復活したカテゴリーであるが、それ以前は宗教誌など他のカテゴリーに含まれていた。

約8割はマレー語による出版である。のちにインドネシア語となるマレー語がすでに定期刊行物では主流であった。さらに出版地を理事州別に見ると大都市を抱えるのバタヴィアが42点、スラバヤが26点と多いのは当然としても、中部ジャワのジョクジャカルタは21点、それに隣接するスラカルタも26点と多い。イスラーム系定期刊行物に限ってもスラカルタは7点、ジョクジャカルタは6点と最多出版地の2つを占める。この2つの理事州は王国領（Vorstenlanden）であり、マタラム王国が分割されて自治領として残った地域である。古都でジャワ伝統文化の中心というイメージとは裏腹に、イスラーム系出版物が盛んな地である⁶⁾。本稿で扱うSMとBIは、宗教誌に分類されている。

2) 初期のムハマディヤ

ムハマディヤは1912年11月18日にジョクジャカルタで、アフマド・ダフラン（Ahmad Dahlan, 1868–1923）を会長として結成された。ジョクジャカルタは、スルタンの宮廷を中心に広がった町である。スルタン宮廷の南北には広場があり、北側広場の北西の角に大モスクがある。さらに、大モスクを囲むカウマン Kauman と呼ばれる敬虔なムスリムが集住する地域がある。ここにはもともと宮廷に仕える宗教役人や大モスクの職員が家族とともに居住しており、その人々を核として宗教色の強い独特の社会を形成していた。ダフランもこの宗教役人の家系出身であり、ムハマディヤはこのカウマンで誕生した。

ムハマディヤの政府からの正式認可は1914年8月22日である。ムハマディヤはジャワ・マドゥラでの活動を願い出たにもかかわらず、認められたのはジョクジャカルタ理事州内に限られた [BI 2(2), 1924: 31] [Alfian 1989: 153]⁷⁾。当初の活動については明らかではないが、目立たなかったようである。ムハマディヤは活動についてはその方法を模索して形成していく途上だったのであろう。組織綱領に謳われたところの、布教、教育、出版、社会福祉の活動を行う担当部署を設置して体系的な活動を行う体制がつけられたのは1920年6月17日の会合であった [Sudja' 2018: 128–139] [Yusuf 2005: 308]。ダフランのもとで学んだカウマンの青年たちがそれぞれの部署の責任者となって活動を担えるようになった時点である。また、ムハマディヤがジョクジャカルタ理事州を超えて活動することが射程に入ってきたのであろう。ムハマディヤは1920年8月16日にジャワ・マドゥラ全域に、1921年9月2日に東インド全域での活動を政府から許可された [Verslag MD 1923: 表紙]。運動の礎を築いたダフランは、1923年2月23日に没した。

ダフラン没後に実質的に運動を牽引したのは、筆頭副会長となったファフロディン（Fachroedin, 1884または1890–1929）である。ダフランの薫陶を受けたカウマン青年の一人で、当初よりムハマディヤのメンバーであった。ジャーナリストとしての経験があり、イスラーム同盟中央の執行委員としても活動してその要人と密接に交流した。ファフロディンの動向はこのSMとBI2誌にどのように影響したかも考えたい。

6) IPO掲載の定期刊行物リストについては Kobayashi[2020]を参照。なおこの項の1930年9月15日付リストのデータ集計は筆者自身のものである。

7) 政府からの認可は1914年8月22日であるが、のちの規約には1912年11月18日からの活動であったことが記されている。組織の目的には a. ジョクジャカルタ理事州の原住民にイスラームの教義を広めること、b. 会員に宗教的生活を促進すること、が謳われた [Petrus Blumberger 1931: 92–93]。

第2章 機関誌 *Soeara Moehammadijah*

SMは現在でも月刊で発行されており、出版地も創刊時から変わらずジョクジャカルタである。インドネシアで最も長命の雑誌である。SM発刊についてダフランが何か指示を出したという情報は見当たらないが、運動体が機関誌を発行するのは当時のトレンドであったし、その時代に成長したカウマンの青年活動家も当然発想したであろう⁸⁾。

SMは現代に関してはデジタル化が進んでいるが、植民地期のものはそろったコレクションは存在しない。その発行状況について詳しく記した研究書もなく、またムハマディヤ関係機関に保存されていない。以下、筆者が収集したうち1930年までのSMの発行状況、発行形態について述べる。なお、保存されたSMには、欠損部分があるうえに単語のみならず頁番号にまで誤植があり、確定したことを述べるには時として困難があることも断っておきたい⁹⁾。

1) 発行状況

確認できた最も古いSMは、ヒジュラ暦1333年ズー・アル=ヒッジャ月1日¹⁰⁾(西暦1915年10月10日)の日付で2号と記されている。創刊号はいつ発行されたかは不明で、しかも発行は一端途切れている。1920年に再開されたようであるが、これも具体的にいつからかは不明である。恐らくムハマディヤの出版局タマン・プスタカTaman Poestaka(本の園)が始動する6月下旬以降であろう。この年に関しては12月に発行されたものと思われるSMの一部があるのみである。

以後、1921年1月からは西暦に合わせて毎月発行されている。ところが、1925年7月(ヒジュラ暦1344年ムハラム月)からヒジュラ暦に合わせた出版となった。1929年7月(ヒジュラ暦1348年)から月2回の発行に変更、1930年5月(ヒジュラ暦1349年)から月3回発行になった。しかし、少なくとも1933年4月(ヒジュラ暦1351年)には月1回の発行に戻っている。それ以降、日本占領前の1941年11月までの出版が確認できる。なお、表紙が保存されていないために番号が確定できないものが多々あり、保存順序や頁番号から推定する必要がある¹¹⁾。しかし、組織活動に関してはすべて西暦で表記されているので、表紙のヒジュラ暦表示はシンボリックな意味が大きく、せいぜいイスラームの祭日を読者に認識させる効果があったくらいではないかと思われる¹²⁾。

8) ただし、ダフランはその手になるエッセイとされるものの中で、教育活動における機関誌の重要性を指摘している[Mulkhan 1990: 236]。

9) 収集にあたっては、利光正文氏(別府大学名誉教授)とM. Endy Saputro氏(スラカルタ国立イスラーム学院講師)と便宜をはかっていただいたことを記して感謝します。筆者は、利光氏が1980年代半ばにジャカルタの国立図書館Perpustakaan Nasional(以下PN)で所蔵されていたSMを複製されたものと、アメリカのCenter for Research Librariesのデータ(1990年にPNでマイクロフィルム化されたものがスキャン化)およびEndy氏が提供された個人所蔵のデータを、突き合わせて確認した。

10) ヒジュラ暦とは、預言者ムハンマドがメッカからメディナへ活動拠点を移した西暦622年を元年とする。太陰暦であるために、太陽暦とは1年で平均11日短くなる。

11) 1921年1月以降1930年12月までの発行分で収集できなかったSMは次の通りである。便宜上西暦で示す。1923年1-12月、1926年1-6月、1928年3月-1929年6月の分。なお、今回収集した中ではなくても他の文献では使用されているSMもあり、それは個人所蔵になっていると思われる。

12) 夜に行われた行事は日付が2日続きで表示される。例えば、現在の1月15日夜の集会は、15/16 Januari と記

各号の分量（頁数）は時期によって異なる。1921年は平均8頁、22年から16頁、24年11月から32頁となる。月2回発行となる1927年からは平均24頁、月3回発行が安定する1929年10月からは平均24頁となる。情報量が増えていくのは、出版体制が整備されていったこともあるが、ムハマディヤの活動が拡大してことも大きい。

1920年再開時の発行部数は1000部であったが[Yusuf 2005: 308]、1923年からは発行部数も2000部に増やすとタマン・プスタカ執行部が声明を出した[SM 3(11), 1922: 1]。当時としては多い発行部数と言える。しかし、実際は資金不足などから9月からまた1,000部に戻した[Verslag MD 1923: 57-58]。

編集長は何度も交代した。1915年2号はファフロディン、1921年1月からはハーニー(A.D.Haanie バティック商)、1922年からファフロディンが再登板である。1924年(10月)からはスモディルジョ(Soemodirdjo 情報なし)、1926年7月からはアブドゥル・アズィズ(Abdoel Aziz バティック商)、1927年7月からはユヌス・アニス(Joenoes Anies, 1903-1979)¹³⁾が担当。1929年7月からは編集委員会(Commissie van Redactie)とだけ記された。編集長はムハマディヤの組織事情に通じていること、また、読者からのイスラームに関する質問に答える力量も要求された。SM編集長に限らずムハマディヤの役職には手当はなかったので、自ら生計を立てる傍らの奉仕活動であり、負担は重かったと考えられる。編集長が何度も交代したあげくに編集委員会がつくられたのは、機関誌ゆえに安定した発行をめざしたためと考えられる。

機関誌なので主たる対象読者は会員となるが、当初定期購読料は要求されておらず、図2からは1926年7月の時点でも無料で配布されていることがわかる。しかし、その後いつからかは不明だが購読料が設定されたようで、1929年7月の表紙ではそれが確認できる。宣伝広告はタマン・プスタカの出版物や会員のバティック店や家具屋のもので、件数は限られる。編集長を務めたハーニーやアブドゥル・アズィズは自らのバティック店の広告を何度も掲げてSMを財政的にも支援していた。

2) 使用言語

SMで使用されている言語については若干の説明が必要である。1915年に出版されたSMはジャワ文字によるジャワ語が使用されており、宣伝の部分のみがラテン文字のマレー語である。1920年には全面的にラテン文字のジャワ語となっている。1921年からはジャワ語とマレー語の記事が混在し、1923年から全面的にマレー語に切り代わったようである。

ジャワ語は中部・東部ジャワのジャワ族が居住する地域で話されるが、話し相手によってレベルがある言語である。大別すると目上の人に話しかける丁寧体クロモ(kromo)と話者と同等かそれより社会的に下と思われる人に対する普通体ンゴコ(ngoko)である。記事はクロモ体で書かれたものとンゴコ体で書かれたものが混在している。旧王都のスラカルタやジョクジャカルタではクロモ体は日常的に用いられるが、そこから距離的に遠ざかるほど用いられなくなる。このふたつの地域以外でのクロモ体の通用範囲は限られていたと思われる。

される。これは一日の始まりが日没からと理解されているためである。

13) ユヌス・アニスはYunus Anisと記されることが多い。ジョクジャカルタのカウマン出身で、バタヴィア(現在のジャカルタ)のアラブ人学校で学んだ後にジョクジャカルタへ戻り、1920年代半ばからムハマディヤの青年指導者として活躍した。独立後には会長職(在任期間1959-1962)を務めた。

一方、マレー語は古くから交易用語として用いられ、東南アジア島嶼部の交易拠点では通用した。話者は多くなかったであろうが、地理的通用範囲は広がった。またオランダも行政用語として用いるほか、先述した通り倫理政策で始まった一般庶民用の学校でも教授用語として採用された。マレー語がインドネシアの民族言語として謳われるのは1928年11月にバタヴィアで開催された第2回インドネシア青年会議であるが、当時はまだ一般に普及する途上であった¹⁴⁾。なお、この時期のマレー語には綴りが確定してない単語もあるし、オランダ語が頻繁に混じっている。文法的にもあいまいで解読が困難な場合もある。いわば、まだ確立していない言語であった。

3) 掲載記事

先述した通り収集されたSMはほとんどの外表紙がないが、かろうじて残っているものから出版の趣旨を読み取ってみたい。

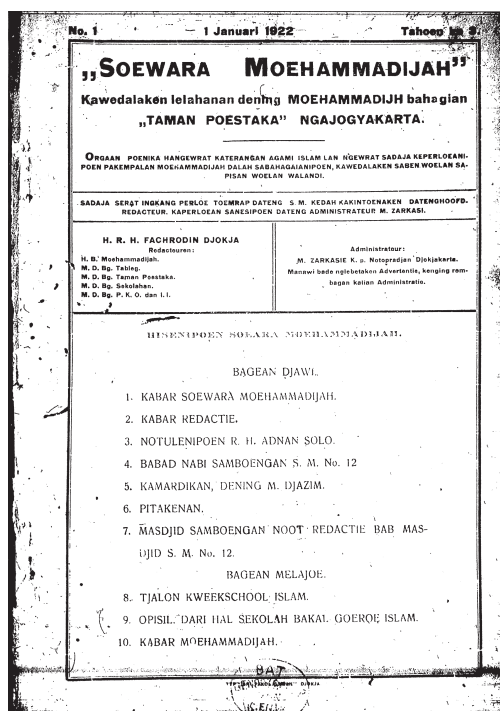


図1 *Soeara Moehammadijah*, Th. III No. 1 (1922年1月発行)の表紙

14) 定期刊行物での使用状況から見ると、ジャワ島外ではほとんどがマレー語出版、ジャワでもマレー語出版が半分以上を占めたが、ジャワ語ならびに西ジャワで使用されるスダ語による出版も1930年代まで相当量あり、このふたつの地方語のリジリエンスは強い [Kobayashi 2020: 106-107]。

再刊後の早い時期のSM（図1）の表紙の題字の下には、発行についてクロモ体のジャワ語で「この機関誌は、イスラーム教の説明を掲載し、およびムハマディヤ協会のすべてまた一部の必要事項を掲載し、オランダ月（筆者注：西暦のこと）毎に発行される」と記されている。また、目次ではジャワ語の部分が半分以上を占める。その後ジャワ語は消え、1926年の表紙（図2）の題字の下にはマレー語で、「イスラーム教の教義と一般知識を広めるために、またムハマディヤの必要のための雑誌である。ムハマディヤのタマン・プスタカ部によって毎イスラーム月に発行され、無料で配布される」と記されている。編集の意気込みを伝えている。



図2 Soeara Moehammadijah, Th. VIII No. 1, Moeharram 1345
 (1926年7月12日発行)の表紙

しかし1930年代に入ると、紹介文は「オランダ領東インドムハマディヤ協会の機関誌、本部は理事州都ジョクジャカルタ（ジャワ）にある」と簡略化された（図3）。目を引くのは表紙の絵であろう。いつから表紙に絵が用いられるようになったかは確定できないが、当時は挿入画も極めて少なく、また写真も1924年から確認できる程度である。図2の中央にあるのはムハマディヤのロゴにある太陽で、ムハマディヤがジャワ全体に日を射している。図3の中央にあるのは第19回大会のポスターで、ジャワ島外では初めてミナンカバウ（西スマトラ）のブキットインギで開催された。ジャワの農民が海の向こうのスマトラ島を眺め、その横にムハマディヤのボーイスカウト組織ヒズブル・ワトン（Hizboel Wathon, 祖国防衛隊）の隊員が寄り添う。ムハマディヤはその日差しをスマトラに注いでいるが、すでに海を渡って活動していることを示す。また、ジャワではムハマ

呼ばれており、何よりも実際の活動を重視していたということであろう¹⁵⁾。

第3章 情報誌 *Bintang Islam*

1) 創刊に至る経緯

BIは1923年1月に創刊された。創刊の辞には、それまで『チャハヤ・イスラーム *Tjahja Islam*』(イスラームの光)という情報誌を発刊していたが、ジャワ語であったため(筆者注:実際はジャワ語とマレー語の併用)、ジャワ島以外の友人たちからマレー語での出版を求められ、装いを新たにしてその後継誌としてBIを創刊するに至った[BI 1(1), 1923: 1], とある。組織の全国展開を睨んでムハマディヤ色の一般向け情報誌を発行しようとしたのが目的であるが、もうひとつの背景もあった。

BI創刊号に名前のある執筆者はファフロディン、その実兄でやはりムハマディヤの草創期の活動家スジャック(Soedjak, 1882-1962)、モフタル・ブホリ(Mochtar Boechari, 1899-1926)、事務局長のハルソルマクソ(Harsoloemakso, 生年不詳-1924)である。モフタル・ブホリとハルソルマクソはスラカルタのイスラーム布教協会(Sidik Amanat Tableg Vatnah「賢明な布教を託された正直者」の意味:以下SATV)のメンバーであった。SATVは1918年に結成され、著名な布教師ハジ・ミスバ(Mohamad Misbach, 1876-1926:通称Hadji Misbach)が初代会長であった¹⁶⁾。ミスバはふたつの雑誌『イスラーム・ブルグラッ *Islam Bergerak*』(イスラームは動く)と『メダン・ムスリミン *Medan Moestimin*』(ムスリムの広場)を主宰しており、イスラーム同盟の活動家でもあった。同盟内でコミニストが台頭してくると、それに同調してムスリム・コミニストとして知られるようになった。ミスバは農民争議に関与して、1918年12月末から1919年5月7日までと1920年5月16日から1922年8月22日までの2度収監されている[Shiraishi 1990: 150-151, 206, 249]。その服役中(1920年5月-1922年8月)に上記の4人はこのふたつの雑誌を手伝っていた[Shiraishi 1990: 213]。しかし、この2誌では1922年3月以降にはムハマディヤに対する攻撃がなされ、出獄したミスバもムハマディヤが政治に関わろうとしないのを批判した[Shiraishi 1990: 253-261]。ファフロディンたちはその2誌から身を引き[Shiraishi 1990: 260-261] [Anies 1929: 15], モフタル・ブホリとハルソルクソノはムハマディヤのスラカルタ支部の会員となった¹⁷⁾。

BIの最初の編集長はハミッド(M.A. Hamid, 生没年不肖)であるが、ファフロディンがそ

15) ただし、先述のSM1915年2号に掲載された3頁弱のエッセイの末備には、「H.A.D.」のイニシアルがあり、これがHadji Ahmad Dahlanを示す可能性もある。

16) SATV結成に関してはふたつの説がある。イスラーム同盟が提唱したTentara Pembela Kandjeng Nabi Moehammad(預言者ムハンマド防衛隊)設立がきっかけとなったとする説[Shiraishi 1990: 130-137]と、ダフランのブンガジアン(pengajian 宗教講和)に刺激されてムハマディヤのスラカルタ支部の前身として結成されたという説である[Ali 2019: 226-227]。その一方、スラカルタにはそれ以前からすでにイスラーム改革の動きがあって、SATVの結成でその軸が増えたことでは、この二つの説は一致する。しかし、ミスバがSATVを政治活動へ引き込もうとしたのに反発が出て、1919年初めにはモフタル・ブホリが会長になったともいうが[Ali 2019: 227], ミスバは収監されてSATVでの活動はほとんどできなかったと考えられる。

17) SMでは、スラカルタ支部の設立は1922年2月6/7日であり、SATVはその時点で存在しないと述べている[SM 3(4), 1922: 15-16]。

れに代わるのは1924年1月からである。以後没する直前の1929年3号2月まで編集長として名前が記されている。1923年第5号からは補佐として、ムハマディヤ本部事務局長ジョヨスギト(Djojosoegito, 1889-1966)、また20号からはイスラーム同盟議長のチョクロアミノト(Tjokroaminoto, 1882-1934)が執筆者に、さらに23号からは西スマトラ出身で独立後に初代副大統領となるハッタ(Mohammad Hatta, 1902-1980)も協力者に名を連ねた。ハッタは当時オランダ留学中であるが、すでに将来の民族主義指導者として嘱望されていたのであろう¹⁸⁾。

このように、BI創刊に関わったのはミスバと決裂したムスリム青年活動家であった。その経緯や初期のBIに連なった人物には、ブルグラカン時代の民族主義、イスラーム改革運動、コムニズムという思想潮流のせめぎ合い、およびそれに絡むメディア間の抗争が凝縮されている。

2) 発行状況

BIは1923年1月から西暦の月2回発行されることとなった。最初の4年は何とかこのペースを保ったが、1927年は合併号が大幅に増えた。1928年は合併号に加え、8月前半までしか確認できなかった。1929年の前半は混乱したが、後半に何とか持ち直し、1930年は順調に発行されたが年末に発刊停止となった。これは紙面にも反映された。頁番号は1年の通し番号となっているので、それで見ると、1923年は499頁、1924年は481頁、1925年は388(389)頁、1926年は394頁、1927年は355頁、1928年は256(257)頁(欠損で発行が確認できない部分もある)、1929年は558頁、1930年は430(434)頁である¹⁹⁾。平均すると1号あたり20頁の分量となるが、合併号は50頁を超えることもあった。

この発行の不安定さの大きな原因は、BIには専従スタッフがいなかったことである。先述のSMのところで述べた通り、年々ムハマディヤの活動は拡大していった。ファフロディンやスジャックはムハマディヤの本部役員でもあるために、組織活動の仕事が増えるとともに編集に時間を割けなくなったのであろう。1926年には主要な書き手のひとりであるモフタル・ブホリが急逝した。ファフロディンも病気で半年戦列を離れた時期もあった。後述する大きなトラブルへの対処を迫られていた。そのような重圧の中でファフロディンは1929年2月に没し、先述のアニスが後継の編集長となった。

また、SMが組織予算での発行であったのに対し、BIは一般読者を対象としたために、読者が払う購読料に依存した。誌面から見ると広告収入はわずかだったと思われる。購読料の未払いに悩まされ続けたのか、ほぼ毎号のように購読料請求の知らせが掲載された²⁰⁾。発行部数は1923年出版当初の発行部数は1500部、1924年には2000部に達したが、これが最大であった。1926年には購読

18) ハッタは、同じく西スマトラ出身のイスラーム同盟指導者アグス・サリム(Agoes Salim, 1884-1954)の仲介で名前を連ねることになったのであろう。ハッタは2回BIに寄稿している[B I 1(23), 1923: 489-494; 2(8), 1924: 156-162]。しかし、ハッタは自伝[Hatta 1979]ではオランダ語雑誌に寄稿したことは触れているが、BIには触れていない。ハッタにとっては、BIは数多く寄稿したマレー語誌のひとつに過ぎなかったのであろう。

19) 筆者はPNに所蔵されているBI原本を複製したが、落丁もあり保存状態は良好ではない。次の号が欠損となっている: Th. 2 No. 17, Th. 7 No. 2。また、次の号は欠損なのか発行されなかったのかも不明である: Th. 5 No. 21 ~ 24, Th. 6 No. 16 ~ 24。

20) BIの定期購読料(郵送料込)は国内で1年につき6ギルダーである。1冊0.25ギルダーの値段であるが、これは1930年のコメの5キロ分に相当し[Nakamura 2012: 130]、高価であるには違いない。しかし、食料品は安価だったようで、現代の価格感覚でははかりにくい。

料未納者を除外して発行部数を1000部に落とし、1928年には800部になった[BI 7(1), 1929: 3-4]。

興味深いのは、BIは他誌と刊行物を交換しており、1924年初頭の段階で交換相手は38誌に及んだ。その内訳はジャワ島各地から22誌、ジャワ島外から8誌、海外から8誌である。特に目を引くのは、西スマトラからの7誌のイスラーム系定期刊行物である。パダンから3誌、フォート・デ・コック(現在のブキッティンギ)から4誌あった[BI 2(4), 1924: 72]²¹⁾。西スマトラは東インドのイスラーム改革運動の発祥地であり、1926年にそこに支部が誕生したことはムハマディヤの全国展開への先駆けとなった。支部誕生前からジャワと西スマトラのイスラーム指導者間に交流があったことを示す。

BIが発行されたのは8年間であったが、同年代の定期刊行物の中では比較的長い方だった。

3) 掲載内容

BIは何をめざしたのか。創刊号に掲載された執筆者挨拶の中でファフロディンが繰り返した言葉は、「真実の光 sinar kebenaran」「全東インドにおける民族と我々ムスリムの全体 *sekalian bangsa dan kaoem kita Moeslimin di seluruh Hindia*」「実践 *praktijk*」である[BI 1(1), 1923: 3-4]。「真実の光」はイスラームの教えのみならず正確な情報も含まれるであろう。宗教と社会関する情報を東インド領全域に居住する人々、特にムスリムに届け、ムハマディヤ自身は実際の活動でそれを示したいということであろう。

また、BIの理念はその表紙(図4)からも読み取れる。太陽(ムハマディヤのロゴ)が上部中央から光を放ち、その下の地球儀は世界を視野に入れていることを示す。両脇の椰子の木や地上から生える花は東インドの自然の豊かさを象徴している。日付の下に、「イスラーム教の知識とイスラームに関連する国内外のニュースを内容とする新聞(雑誌)、オランダ月の10日と15日に発刊」と記している。さらに、表紙の最上部にあるTHE STAR OF ISLAMも目を引く。アラビア語でもオランダ語でもない英語を選んだところに、英語への憧憬と世界に通用するのが英語であるという認識があらわされている。地球儀の絵と相まって強い国際志向を感じさせる。表紙はほとんどの号で失われており、いつまでこの表紙が使われたか、またどう変わったのかは不明である。

BIにも掲載順序に決まった形はなく、そのときどきの状況に応じた構成になっている。内容は基本的宗教知識の解説、国内情報、海外情報である。号によってそのポジションは異なるが、全体で見るとどれが突出しているとも言えない。

宗教に関しては、イスラーム改革派誌の特徴とも言えるクルアーン解釈が目につく。ファフロディンによるエジプト人ウラマーのキタブ(kitab 宗教書)のマレー語訳も連続して掲載された。読者からの質問(多くはイスラームの法&神学理解に関するもの)にもよく回答しており、当時のムスリムの生活も垣間見ることができる。これはほとんどファフロディンが回答している。また、国内情報はほとんどがムハマディヤ関係であるが、ムハマディヤの事情や立場への理解を求めて情報を組織外の読者へ発信するスタンスが多い。いくつもの運動体が競合するブルグラカンの中でムハマディヤがどういう位置にあるかにも触れ、自らの立場を確認すると同時にアピールもしている。SMでは他の団体への言及はほとんどなされないの、これが会員に向けた情報を掲載するSMと

21) 海外からの8誌の内訳は、オランダから3誌で、これは恐らく東インドの留学生からであろう。その他に英領マラヤから3誌、英領インドから1誌、セイロン(現スリランカ)から1誌である。なお、発刊初期には購読者がベナン、シンガポール、ジョホールなど英領マラヤにもいた[BI 7(1), 1929: 4]。



図4 *Bintang Islam* Th. II No. 3, 4 Rajab Zee 1342
(1924年2月10日発行)の表紙

の違いである。一方、先述の共産党蜂起のような重大な事件には触れていないが、これはムハマディヤが政治を避けたからというだけでなく、報道すること自体に規制がかかっていたからであろう。

さらに、特筆すべきは海外情報の多さである。当然イスラーム圏に関する情報は多いが、そこに介入する列強の動向にもよく触れている。第一次大戦後の国際情勢に中部ジャワのムスリムがそれほど高い関心を向けていたことは論じられたことはなかっただけに、興味深い。

また、上記の宗教、ムハマディヤ、海外のイスラームの三つが同時に関わった問題として、英領インド発祥のアフマディーヤ (Ahmadiyah)²²⁾に関する情報が1924年から1925年にかけてBIの誌面を多く占める。1924年3月にアフマディーヤの使節2名がジョクジャカルタに到着し [BI 2(9), 1924: 179-183], ファフロディンたちの関心を引いたためだが、SMでのアフマディーヤの扱いはBIと比べると小さい。1927年頃からアフマディーヤとの関りはムハマディヤでは大きな問題となったが、最終的にはファフロディンはムハマディヤへの影響を最小限にとどめようとしたようである。しかし、イスラーム同盟との確執、アフマディーヤ問題の収束を図る最中でファフロディンは没した。ファフロディン亡き後のBIは安定して発行されるようになったが、海外情報は激減し、誌面

22) アフマディーヤは19世紀末に北インドで創始されたイスラーム改革団体であるが、その教義が正統なイスラームから逸脱しているとして問題視された。インドネシアでは少数派として運動は継続しているが、近年イスラーム急進派の攻撃対象となったりしている。

から活力は落ちた。

BIにはファフロディンの個性、動向が強く反映されていた。ファフロディン没後は当初めざした役割を果たせなくなったと言える。

第4章 植民地期のムハマディヤ研究の可能性

植民地期のムハマディヤを追った研究としてスタンダードとされるのはアルフィアン [Alfian 1989] である。SMとBIは参考文献にあげてはあるが、典拠とした資料のほとんどがオランダの植民地文書である。この作品は1969年の博士論文が出版されたものである。同じ頃植民地期インドネシアのイスラーム運動を概観したドゥリアル・ヌルの先駆的な研究 [Noer 1973] があるが、ムハマディヤの扱いは小さいうえに、やはり同時代のマレー語（インドネシア語）資料はわずかしか使われていない²³⁾。恐らく、植民地文書を重視し、同時代の現地語資料を2次的に扱うというのが、アルフィアンやドゥリアル・ヌルが博士論文に取り組んだ時代の研究の手法だったのであろう²⁴⁾。管見の限り、植民地期のSMを基本資料にしたのは、利光正文によるムハマディヤの支部成立についての一連の研究 [1988 他] が目立つだけで、限定的にしか使用されていない。

植民地文書はブミプトラ運動の監視という政治的理由で作成されるだけに、出来事の時間、場所、スケールなどについては正確な情報を提供する。集会は現地の行政官や警察が監視するだけでなく、バタヴィアの原住民問題顧問局 (Kantoor voor Inalndsche Zaken)²⁵⁾ の係官も同席する。その係官によって登壇者の演説は要約されるため、基本的な情報は得られる。しかし、やはり報告書作成者にはそれなりの視点があり、その関心の外にあって記録されない事柄がある。SMとBIには従来の研究では関心が向けられなかったふたつのテーマが明らかにできる可能性が大である。

第1に、ムハマディヤの運動拡大を支えた日常的な組織活動である。SMに面々と掲載される活動・会計報告にはドラマ性はないが、全体で考えると1920年代という時代には驚くべき厳格な規律が支部に課されていることがわかる。ジョクジャカルタの本部と支部との間では密な連絡がなされ、本部役員による地方視察や運営指導が行われている。組織の広がりを地道に追えるが、欠号部分の時期については別の資料が必要となる²⁶⁾。

23) なお、ほかにもBIを使用した研究はあるが [Shiraishi 1990] [Laffan 2003]、いずれも断片的にしか用いていない。

24) この2人のインドネシア人研究者は西スマトラ出身で、アルフィアンは1962年からウィスコンシン大学で、ドゥリアル・ヌルは1950年代末かコーネル大学で学んだ。

25) 1899年につくられた機関で、イスラーム研究者スヌック・フルフローニェ (C. Snouck Hurgronje, 1857-1936) が初代の原住民問題顧問官であった (在任 1899-1906)。原住民に関する問題で総督に直接助言する任務を負い、イスラームの専門家がその職に就くことが多かった。現地語に長けてブミプトラ、ムスリムの事情に通じると同時にムハマディヤのような団体指導者とは連絡を取り合うこともあった。同じ植民地官吏でも行政官とは異なるスタンスで見解を述べるのが多かったようである。スヌック以降はその弟子たちがこの職につき、退任後はライデン大学で教鞭をとることが多かった。SMやBIには、原住民問題顧問官とムハマディヤ本部の間との通信が掲載されたこともある。

26) アルフィアンはタマン・プスタカから出版された多くのムハマディヤの報告書を参考文献にあげている。それらの資料は現在ほぼ散逸しているものと思われる。

第2に、ムハマディヤ発展に大きな貢献をしたファフロディンがクローズアップできることである。ファフロディンについてはプルグラカンに関する先行研究では必ず名前が登場するにも拘わらず、深く掘り下げられることはなかった。インドネシアでも、独立後の1964年に「国家独立英雄」に顕彰されたが、その後はムハマディヤの人々からもほとんど忘れ去られた存在であった。ファフロディンを通して、イスラーム指導者が植民地支配体制をどのように見ていたのか、プルグラカンの中のムハマディヤ運動の位置など、今まであまり考察されなかったイスラームとナショナリズムが絡む問題に踏み込める。さらに、なぜ当初ムハマディヤはアフマディーヤを歓迎したのかなど、現代にまで続く問題がクローズアップされる可能性がある²⁷⁾。

その他、SMにもBIにも何度もキリスト教使節に批判的なコラムが掲載される。現代では論じにくい問題であろうが、これも見過ごしてはならないだろう。

なお、すでに今の段階でも植民地文書に依拠した研究で述べられたこととSMやBIの間に齟齬が認められるいくつかの点に具体的に触れたい。

1) 1922年1月の国営質屋労働者組合争議におけるムハマディヤ

先行研究では、ムハマディヤはこの争議を支持したが、争議の失敗に直面してイスラーム同盟とともに撤退して他の運動体から非難を浴びたとされている〔永積1971〕〔Shiraishi 1990〕。しかしSMでは、ムハマディヤのイモギリ (Imogiri ジョクジャカルタ近郊) 支部がこの争議に巻き込まれたが、「伝染して」参加したのなら戻れと言うし、本部への波及を懸念する、と記されている(クロモ体のジャワ語によるコラム)〔SM 3(3), 1922: 9〕。積極的に支持して参加したのではないという言い分である。

2) 1924年に結成された「ウマット・イスラーム Oemat Islam」(イスラームの人々)

1925年2月21日ムハンマド昇天祭に合わせてムハマディヤがウマット・イスラーム行列を敢行した。先行研究では、ウマット・イスラームを敬虔なムスリムの反コミュニスト統一戦線としている〔Shiraishi 1990: 322-323〕。しかし、BIは宗教問題を前面に出している。当時のジョクジャカルタのオランダ人理事官がキリスト教の布教活動に肩入れして宗教中立政策を侵害したことに対する抗議行動として、前年の8月から委員会をつくって計画したと述べている〔BI 3(5), 1925: 77-80〕。

3) 1927年ファフロディンのイスラーム同盟に対する反論

1926年イスラーム同盟の1支部からムハマディヤに対する非難がパンフレットとして流布され、騒動になった。係争の沈静化をはかった後、ファフロディンはBI誌上で4回にわたってその非難に反論した。アルフィアンは、その一部(ムハマディヤの地方指導者がイスラーム同盟とその政策をこきおろした)について「ファフロディンは1支部(ブローラ、東ジャワ)を除いてそれを否定した」〔Alfian 1989: 224-226〕と、IPO掲載のBI要約に依拠して述べている。しかし、BIのオリジナルテキストでは次のようにある。「そのとき、イスラーム同盟中央は、明確な証拠を示すことができず、ただブローラのイスラーム同盟側の言い分を示しただけだった。もしブローラからの知

27) 近年ファフロディンについてはインドネシア人研究者の手になる評伝〔Mu'arif 2015〕が発表されたが、SMは使用されているもののBIは使用されておらず、ファフロディンの思想に踏み込んでいない。

らせが本当であったとしても、ブローラだけのことに過ぎない。大半のムハマディヤ指導者ではなく、たった1人のことである。その知らせは Walfadjri (イスラーム団体の名称) で本部代表が知らせたように真実でない可能性がある。つまり、誤解ゆえのことだったというのである。」[BI 5(11-12), 1927: 177]。要するに、認めていないのである。

このような問題については、今後の検証課題としたい。

さらに、SM と BI は 1920 年代のムハマディヤ運動の展開を考えるうえではこの2誌を同時に用いるのが、相互補完的情報を得られる。しかし、一度だけ全く同じ情報が掲載されたことがある、それは前述の1926年8月にイスラーム同盟の1支部からムハマディヤに対する抗議文書が公になったときに出されたムハマディヤ本部声明 [SM 8(3), 1926: 70-73] [BI 4(16), 1926: 261-262] である。ムハマディヤが受けた衝撃の大きさがわかる。この事件については先行研究でも触れられている [Alfian 1989: 221-229] [Noer 1973: 235-237] が、その経緯についてはもっと掘り下げる必要があるだろう。

また、本稿でとりあげた時期の SM と BI を概観して推測できるのは、指導者の交代や組織整備(特に教義の明確化)によって1930年代にはムハマディヤには多くの変化が起きたであろうということである。BI 廃刊後、1930年代には複数のムハマディヤ系の情報誌が発刊された。しかし、いずれもまだ十分に使用されていない。こうして見ると、植民地期のムハマディヤに関する研究はアルフィアンによって基本的な枠組みが示された段階でまだとどまっており、新たな進展が必要とされている。オランダの植民地文書は重要である反面、宗教運動では言説が主題となるだけに、ムスリム自身の声は第一義的に扱われる必要があるのではないだろうか。

参考文献

〈オランダ領東インド政府法令〉

Staatsblad van Nederlandsch-Indië, 1856, 1906. Weltvreden: Landsdrukkerij.

〈定期刊行物〉

Bintang Islam, 1923-1930.

Soeara Moehammadijah, 1920-1930.

〈ムハマディヤ本部の刊行物〉

Verslag Moehammadijah di Hindia Timoer: Verslag Tahoen ke X (Januari-December 1923). Pengeroes Besar Moehammadijah di Djokjakarta. (Verslag MD と略)

〈本・論文〉

利光正文 1988 「南スラウェシ (セレベス) のイスラーム改革運動研究 1: ムハマディヤ・マカッサル支部設立に関する覚書」『史学論叢』18: 47-61.

—1990 「北セレベス (スラウェシ) の初期ムハマディヤ運動に関する覚書」『史学論叢』21: 117-130.

—1993 「中部ジャワ北岸のムハマディヤ運動」『史学研究』203: 42-59.

—1994 「ムハマディヤ・バタヴィア (プタウイ) 支部の成立と発展」今永清二編『アジアの地域と社会』勁草書房: 218-251.

—1995 「植民地期アチェのムハマディヤ運動」『東南アジア: 歴史と文化』24: 76-99.

—1997 「20世紀前半西部ジャワ・ブリアンガンのムハマディヤ運動: ガルト支部を中心として」『広島東洋史学報』2: 31-40.

—1999 「南ボルネオのイスラーム改革運動」『別府大学大学院紀要』1: 23-32.

—2014 「ミナンカバウ (西スマトラ) におけるムハマディヤ支部の成立と発展 (1)」『別府大学紀要』55: 23-34.

- 永積昭 1971 「1922年の国営質屋労働組合争議とインドネシア諸政党」『アジア・アフリカ言語文化研究』(4): 113-129.
- Adam, Ahmat B. 1995. *The Vernacular Press and the Emergence of Modern Indonesian Consciousness (1855-1913)*. Ithaca, New York: Cornell University.
- Alfian. 1989. *Muhammadiyah: The Political Behavior of a Muslim Modernist Organization under Dutch Colonialism*. Yogyakarta: Gadjah Mada University Press.
- Ali, Muhammad. 2019. "Sufisme dalam Pandangan Muslim Modernis Awal: Telaah Pemikiran Tasawuf Kiai Moechtar Boehari (1899-1926)." *Journal Lektur Keagamaan*, 17 (1): 217-240. <https://doi.org/10.31291/jlk.v17i1.606>
- Hatta, Mohammad. 1979. *Memoir*. Jakarta: Penerbit Tintamas. (大谷正彦訳 1993 『ハッタ回想録』 めこん)
- Kobayashi, Yasuko. 2020. "Islamic Periodicals in Late Colonial Indonesia." *Academia Social Sciences* 18: 95-118.
- Laffan, Michael Francis. 2003. *Islamic Nationhood and Colonial Indonesia: The umma below the winds*. London and New York: Routledge Curzon.
- Mu'arif. 2010. *Benteng Muhammadiyah: Sepenggal Riwayat dan Pemikiran Haji Fachroedin (1890-1929)*. Yogyakarta: Suara Muhammadiyah.
- Mulkhan, Abdul Munir. 1990. *Pemikiran Kyai Haji Ahmad Dahlan dan Muhammadiyah dalam Perspektif Perubahan Sosial*. Jakarta: Bumi Aksara.
- Nakamura, Mitsuo. 2012. *The Crescent Arises over the Banyan Tree: A Study of the Muhammadiyah Movement in a Central Javanese Town, c.1910s-2010, 2nd Enlarged Edition*. Singapore: ISEAS.
- Noer, Deliar. 1973. *Modernist Muslim Movement in Indonesia 1900-1942*. London etc.: Oxford University Press.
- Petrus Blumberger, J.Th. 1931. *De Nationalistische Beweging in Nederlandsch-Indië*. Haarlem: H.D. Tjeenk Willink&Zoon N/V.
- Shiraishi, Takashi. 1990. *An Age in Motion: Popular Radicalism in Java, 1912-1916*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Sudja', H.M. 2018. *Cerita Tentang Kiai Haji Ahmad Dahlan: Catatan Haji Muhammad Sudja'*. Yogyakarta: Suara Muhammadiyah.
- Yamamoto, Nobuto. 2019. *Censorship in Colonial Indonesia, 1901-1942*. Leiden/Boston: Brill.
- Yusuf, Yunan (ed.), 2005. *Ensiklopedi Muhammadiyah*. Jakarta: PT Raja Grafindo Persada.

Two Periodicals that Describe the Muhammadiyah in the 1920s:

Soeara Moehammadijah and Bintang Islam

Yasuko KOBAYASHI

Abstract

The Muhammadiyah (followers of Muhammad) is one of the two mainstream Muslim associations in Indonesia. It is the only mass organization that developed nationwide before independence. Despite the new radical Muslim groups emerging in the recent decades, this moderate Muslim movement has shown resilience. It is essential to reconsider how this association has become rooted in the society since the colonial times.

The Muhammadiyah, founded in 1912, was permitted to expand its activities beyond the Yogyakarta Residency, to all over Java and Madura in 1920, and further to the entire area of the Netherlands Indies in 1921. Two periodicals that documented the development of the Muhammadiyah in the 1920s are *Soeara Moehammadijah* (The Voice of the Muhammadiyah) and *Bintang Islam* (The Star of Islam). The former was the organ of the Muhammadiyah, and the latter was published by its young leaders as an information magazine targeting the general audience. They contain detailed information on the activities and thoughts of the Muhammadiyah leaders of the time. This information was difficult to obtain from the colonial documents, on which the preceding works of Indonesian history mostly depended.

These periodicals give us an insight into the Muhammadiyah way of thinking, the viewpoints of Muslims on the society, and the manner in which they organized their activities.